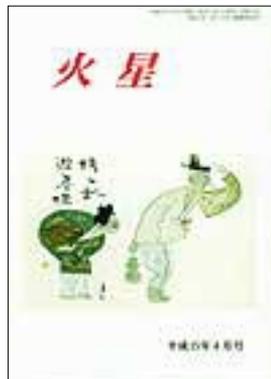


火星

平成 15 年 4 月号



PDF 制作

俳誌の salon

四大抄

山尾玉藻

梅の夜の管を通りし母の尿

夜の梅に母に酸素を足しにけり

梅東風や母の汚せし昨夜のもの

水平に母移さるる春灯

銀欄に覆はれてをり春の夜

土筆野に遊びし足を拭きやりぬ

喪草履にひしめきみたるいぬふぐり

火葬場は別の囀なりしなり

けふよりは喪ごもりの春灯しけり

踏青へ誘ひのありてうれしかり

火星作品

山尾玉藻選

ほろほろと雪零れくる二日かな
神戸 深澤 鱻

七種や根のあるものの根のほひ

繭玉の四五本ほどの翳りかな

奥飛驒や束ねて寒き唐辛子

啼く声の鶴となりたるのんどかな

農閑の父と子にある狸
笠岡 桑田眞佐子

寒肥す蜜柑の皮のちらばるに

水の辺に水の音ある避寒かな

水仙の汀 囲ひに 舫舟

洲めぐる間に二羽や春の鴨

蛤御門鳩が歩いてお正月
箕面 浜口高子

としよりの家にあつまる寒雀

かさかさの掌に返したる海鼠かな

凍鶴の上を日の塵通りけり
池まひる鳥が寒さを持ち寄りぬ
糶台の下へ氷柱の蹴り込まる
じやんけんで糶りおとされし鬼をこぜ
ワイングラス並ぶ順ある三日かな
福笹売笹の葉掃いてゐたりけり
ふつつつと小豆煮えをり寒雀
茶の花のぽとぽと零る日昏かな
反り橋の下りのこはき春著かな
北山のふくれてきたる霰かな
初大師九条ねぎ畑明るかり
春月や樹木の肌のうすみどり
魛網煙束ねてゐるごとし
初富士も昼餉となりしふたりかな
砂町に日は残りをり晦日節
高階に鳥濡れてをりなづな粥
単帯ほどの流れや冬落暉

西宮 米澤光子

大阪 助口弘子

神戸 嵯峨根鈴子

選のあとに

山尾 玉藻

ものを素早く移動させたり滑らせたりしているのだろう。その場所に「氷柱」が落ちていたのだ。邪魔なものを取り除かねばならない。「蹴り込まれる」に糶場の動きが瞭然と見えてくる。

七種や根のあるものの根のほひ 深澤 鱧

北山のふくれてきたる霰かな 助口 弘子

七五の表現は理屈っぽいようであるが決してそうではない。また「根のあるもの」は御形やすずしろのような根菜類だけを指しているのではなく、七草全体を言っている。この句の巧みさは「根のほひ」にある。これは薄味の粥故に感じる生臭さ、青臭さの味を言っているのだ。「根のほひ」は感覚的な措辞であり、読者にはこの表現の方が垂直に伝わってくる。

「ふくれてきたる」も巧みな表現である。「北山」を時雨雲が覆ってきたり、輪郭が判然としなくなってきたのだ。「ふくれてきたる」はその情景の表現である。「霰かな」の霰は、勿論作者が居る場所での現象である。冬の京の情景を遠近法を使いながら的確に捉えている。

農閑の父と子にある狸 桑田眞佐子

節分の寒がる人を連れぬたり 丸山 照子

秋の収穫も終ると農作業もひと息つく。その農閑期の楽しみの一つが「狸毘」なのだ。この句、「毘」をかけた後の時間を詠っているのだ。「毘」を見に行くまでの楽しみみの時間のことである。「父と子」と言う組み合わせがいかに良い。

「寒がる人」は同行の友人などと捉えても良いが、ここでは御主人と見る方が良いだろう。平明な言い回しであるが俳諧味充分である。因みに立春では句に成らない。

糶台の下へ氷柱の蹴り込まれる 米澤 光子

一椀を洗ふに足りし水の冷え 紡車 洞

糶の最中を詠んでいる句。「糶台」の前では糶り終わった

このところこの作者の句を取上げる事が多いが、実感として伝わってくるからであろう。「一椀を洗ふに足りし」は独り暮を端的に表わしている。それでも冬の水は冷たいのである。老いを肯定しながら生きておられ、読者からはその生活

を楽しんでおられるようにも見え、好感を覚える。

大きな音に変へて貰ひし初電話 山口二三子

この句の「電話」の相手もお孫さんと限定して良いだろう。それも未だ舌が廻り切らないお孫さんだろう。「大きな音に変へて貰ひし」は大いに納得できる。こころの弾む目出度さであり、佳い新年を迎えられたようだ。

うしろよりのひと声が欲し初鏡 金澤 明子

「初鏡」の句としてはちよつとずらした所、異色である。「うしろよりのひと声」の主は、やはり亡くなられたご主人が良い。「まだまだ若いよ」などと声をかけられた覚えがあるのかも知れない。それが冷やかしかしてあつても、否、冷やかしかしてあつただけに今の寂しさがより募るのだろう。秀句である。

ひと雨と思へぬほどの物芽かな 土屋 酔月

思ったことをそのまま述べたような表現であるが、驚きの様子がよく解る。「物芽」と言うものは、恐らく早く出たい出たいと思つているのに違いない。そこへの「ひと雨」であり、絶好の誘い水だったのだ。ものを静かによく見ておれば、一日にして風景が変わるものである。

凍土をつついて 凧の帰ってくる 小林 成子

「凧の帰ってくる」と凧に焦点を当てているが、幼い子が帰つて来た光景である。それも未だ五、六歳の子供がよい。背に余るほどの凧を引き摺るように帰つて来たのだろう。「凍土をつついて」に子に対する愛しさが滲み出ている。恐らくこの子は凧を上手く揚げられなかったのだろう。

節分や娘盛りの客二人 村上留美子

「娘盛りの客二人」は間違ひなくお譲様のお客さんだろう。娘盛りの三人であればさぞかし姦しい事だろう、その華やかさに作者は圧倒されておられるのだろう。もしかするとちよつと仲間に加わつてみたかつたのかも知れない。「節分」の季語も過不足ない。

夫と犬戻り来て飲む寒の水 森 茂子

この句の良さは「夫と犬」と並列化した事に尽きる。同時に帰つて来て同じように水を飲んでるのであるが、犬は夫の水、夫は夫の水(?)を飲んでるのである。この俳諧、大いに楽しませて頂いた。

(以下略)

差知子俳句鑑賞

辛夷いま天へ禱りの燭揃ふ 差知子

(『岡本差知子句集』より 昭和五十四年作)

辛夷は背の高い木。白い花が春の空に輝く日本特産種。天武帝に献上されたという。辛夷(しい)という古名がある。まさに禱りの燭。

(千枝子)

玉藻俳句鑑賞

沈みゆく竹笠のごとく眠りけり 玉藻

(「火星」平成十四年四月号より)

魚や貝を捕える小籠が沈められてゆく。それはゆっくりゆっくりと、川の流れの間を川底へと辿りつく。きつと心地よい眠りにつかれたのであろう。ご自分が川底へ沈んでいく様に眠りの世界へ辿りつかれた。とてもすんなりと溶け込める直喻である。

(高子)

恒星圈

大山文子

玉葱を剥く大寒の雲垂るに
強霜やクレーンが吊りし朱の鳥居
葛橋かけかへてゐる冬葎
節分を明日に父の骨納む
佳き声の般若波羅蜜多日脚伸ぶ

飯塚 糸子

まんべんに木枯吹きぬ須磨明石
落柿舎へちよつと立ち寄る隙間風
甲高く杜いでられし御神渡り
洋風をまあるく囲む阿蘇五岳
櫓や幡ひるがへる寺内町

岡 和絵

汲みたての甘き若水ふふみけり
お降りや僧読んでゐる文庫本
松過ぎの畳紙の紐ちぎれさう
帰るさの橙色の寒の月
日脚伸ぶ露店の前の人だから

伊藤多恵子

探梅の両手だらりとありにけり
合格や凍星仰ぎぬたるなり
臘梅のおほかた剪られ裏に声
種子島銃手離すと春障子
福寿草隅に立て置く古ブーツ

奥田 節子

風花す割れば碎ける黒砂糖
切株に冬將軍の座りをり
石敷の寒月光に磨かれぬ
太陽が木端微塵となる氷柱
太陽が河馬に吞まれし冬至かな

獅子座

山尾玉藻推薦

加藤 君子

高尾 豊子

丸山 照子

霜晴やいつもの刻の退職日
七草や専業主婦といふものに
風花や客として入る応接室
新しき保険証届くすみれ草

火の焚かれぬて静かなる初詣
人の日のふたりで入りし石舞台
福笹を揺らし自転車通りけり
風神が戸を叩きをり初句会

大東由美子

戸栗末廣

覗くたび震へてゐたる寒牡丹
年明くる遠近両用眼鏡かな
梅東風にビニールシートのめくれやう
うかららと僧を待つ間の春の雪

着ぶくれて猫語話してをられけり
お降りのしづかなりけり庭に鳥
寒柝の一打は山へ放ちけり
篋のときをり雪を撥ねにけり

吉田 泰子

廣畑 忠明

薄氷に金魚のあぶく上りけり
白足袋の教頭と会ふ暇かな
上海のロビーの梅の香りけり
三宝に梅干飾る蛸薬師

雪どさと落ちてロビーへツアー客
床の間に日の移りたる鏡餅
パチンコの雑多な音へ寒波くる
旨さうな煙草の翁冬木の芽